

## 『ファウスト』第二部に於ける行為の救済

長谷川 茂 夫

ゲーテの『ファウスト』全編の結末となる「山峡」の場では、次々に登場する教父達そして天使達や童子達などがファウストの通り抜けるべき浄化と昇天の各ステージを言わば代理として具現してゆく。この時に今までファウストであった人格は、「さなぎ」の状態にとどまり、もはや個人として自己発現をすることはない。その理由として先ず挙げられるのは、『ファウスト』という壮大な作品の寓意劇という特性である。この特性について筆者は他の論文でも一貫して主張して来た。その一例を挙げると、古典的ヴァルプルギスの夜でガラテアがアフロディテの役割を勤めたように、古典古代の様々な神格や人物が、限られた例外を除き伝統的な名称を避けて登場することがある。なぜならば神話に於いて名前は本質と分かち難く結びついているものであり、有名なまたは無名の偉大な語り手達が作り上げ、磨き上げて来た超越的な力や運命の典型が、その名前に凝縮しているからである。そして寓意というものは、或る歴史的・文化的な背景なくしては成り立ち得ないがゆえに、自身の作品に堅固な表現を与えるため、このような神話的形象に或る程度頼りながらも、その一方で伝統的な意味内容の重みに囚われてそこへ全面的に依存することの弊害を避けるためにゲーテの用いた方策が、比較的下位の神格として、言わば文学的に成熟し切っていない名前を採用することであった。アフロディテという名前の代わりにガラテアを用いることで、同じ美の典型ながらも、そこへゲーテ独自の寓意を付与する自由度が確保されたのである。

では、この「山峡」でファウストは何故代理を必要とするのであろうか。中世の民間伝説から生まれたとはいえ、ファウストは殆どゲーテの創作した人物と言ってよいのではないだろうか。その答えは、この場面の本質と深く関わっ

て来る。即ち、ファウストの救済と昇天を実現すべきこの場面が、作品全体の総括として、ファウストという人物像が具現する問題性へのゲーテの解答を提出する役割を必然的に担わなければならないからである。ことここに至ると、ドラマの筋立ての中でファウストの行った行為の善悪は問題とならず、彼が最高のもので自分に課した「行為する」という原理に焦点が当てられる。それはとりもなおさず、ファウストの運命が個人としての偶然性を脱却し、人間全体の宿命として普遍的に捉えなおされるということである。即ち、ファウストの救済は、彼がその典型として一身に具現する原理の救済へと転化する。そしてファウストの現象的な個人性が背景へと退くのに比例して、救済の達成される構造が明瞭に浮かび上がって来るのである。

では、その過程をテキストに則って詳細に見て行こう。本論では「山峡」の場の全体を翻訳して引用した。<sup>1)</sup>

## 山峡

### 森林、岩盤、荒涼たる土地

聖なる隠者達が山地を下から上へと階梯を成すように分散し、断崖と断崖の狭間に身を置いている。

### 合唱と木霊（11844～11853）

深き森は、靡き打ち寄せ、  
磐石は、重く迫り来る、  
樹根は、絡み纏わり、  
幹は幹に接して延びる。  
浪また浪が奔流となり、  
底知れぬ洞窟がはぐくむ。  
ライオン達は、優しく黙して  
我らの回りを巡り、  
清められた土地を、

聖なる愛の宿りを、崇める。

この合唱が後から登場する隠者達や教父達のどこまでの範囲から成り立っているのかは定かにされていない。合唱が「木霊」するという設定は、むしろ主体を明確化しないという意図があるためであろう。それは、ここで歌われている内容が導入部としての一般性を持つことと符合する。ここで導入された要素は、以後おのおのの教父によって逐次敷衍されてゆく。

ゲーテが『ファウスト』の掉尾となる「山峡」の場面で手始めとしたのは、四大元素のダイナミックな働きを呼び起こすことであった。それは、この土地の尋常ではない特性を簡潔かつ大胆に提示することで成されている。森は風に靡き、岩は聳え立ち、浪は逆巻き、稲妻が走る。四大元素が躍動し、生命力の根源が荒々しいまでに露呈されるのである。かつてファウストがノストラダムスの書を手引きとして生命力の根源を垣間見たとき、それは地霊の姿を取ってファウストを圧倒した。しかしここでの隠者達は強烈な生命力の中心に身を置いているが、彼らがそれによって滅ぼされることはない。なぜならばその原動力となり、それを支配しているのは聖なる愛の力だからである。ここでファウストの代理となる隠者達が、むしろ生命力の一部として受け入れられていることが、地上的である地霊の世界と、この「天上」世界との根本的な相違である。そしてファウストの「死後」に提示される世界の冒頭で、このように生命力が横溢する有様は、この「山峡」が天国へ至るための煉獄にあたるものではなく、それ自体が既に新しい世界であることを如実に物語っている。

法悦の教父、上下に浮遊しながら。(11854~11865)

永遠なる歡喜の炎  
燃えあがる愛の絆  
煮えたぎる胸の痛み  
泡立つ神の熱情。  
矢じりよ、私を貫け、

手槍よ、私を打ちひしげ、  
こん棒よ、私を打ち碎け、  
稲妻よ、私を焼き尽くせ、  
虚無なるものはすべて  
束の間と成れ、  
永続の星よ輝け、  
とわなる愛の精髓よ。

「浮遊」する教父という発想が『イタリア紀行』に記されたフィリッポ・ネリに由来することは、注釈者達によってつとに指摘されている。しかしここでは、この歴史的人物が「法悦の教父」像の形成に与えた影響を考察する必要はないであろう。浮遊するという特性を与えることによって、ゲーテはこの土地と住人達の特殊性を明示したかったのである。ファウスト死後の舞台転換によって場面が再び日常世界へと戻ったのではないことを、前節のライオンの不思議な行動は概念的に、そして浮遊は視覚的に、観客へと提示している。また内容的には、この教父とネリとの関係よりも、教父とファウストとの共通性の方に注目すべきである。法悦の教父は、その浮遊能力が示すように、或る程度の非地上的な超越性を備えてはいるのだが、自分自身を含めて刹那的な地上の生を完全に否認し、永遠という絶対性を熱望している。しかしそれは、反面から見れば、未だ地上的なものからの完全な脱却を果たしていないことの証左なのである。そして彼がここで示している否定的な語法は、第一部冒頭でのファウストがすべての知識の有効性に断罪を下す、あの有名な独白への連想を促す。またそこに示される熱狂は、『ウアファウスト』を執筆した疾風怒濤時代の若きゲーテの心情を代弁するかのようである。この親近性から言えば、登場人物がファウストの代理となるという作品構造の中で、教父は、ファウストがこの最終幕へと至る道筋のそもそもの出発点をここにまた新たな発端として据える役割を果たしているのである。

## 深遠の教父，深層で。(11866～11899)

それはちょうど，断崖を成す岩が私の足元で  
深い奈落の上へ安らかに重なっているようなもの，  
それはちょうど，千筋の小川が煌めきながら流れて  
泡立つ奔流の恐ろしい滝となるようなもの，  
それはちょうど，自らの力強い衝動により真つすぐに  
木の幹が大空へと聳えるようなもの。  
それこそが全能の愛であり，  
すべてを生み出し，すべてを育む。

あたりには激しい物音がざわめき，  
まるで森や岩盤が波打っているかのようです。  
でもしかし，愛に満ちた轟きを立てて  
溢れる水は滝壺へ落下してゆきます，  
そのまま谷を潤す使命を帯びて。  
炎を成して落下した稲妻は，  
浄化の役目を果たします，  
毒を孕み濁った大気を。

これらは愛の使い，そして知らせるのです，  
永遠に創造しつつ私達の回りに漂うものを。  
それが私の内部にも火を灯してくれんことを，  
そこでは精神が，惑い，凍え，  
きつく巻かれた鎖の痛みにも似た，  
鈍い五官の限界のなか，虐げられています。  
神様！乱れる思いを静め，  
私の乏しい心を照らして下さい。

上の「木霊と合唱」で提示された生命力の賛歌が、ここで深遠の教父によって敷衍されている。「岩」、「奔流」、「稲妻」、「ざわめき」などに地水火風の四大元素の働きが凝縮して提示され、またそれらを束ね、総てを育む愛の力が改めて称えられるのである。この四大の生産性賛美は、「古典的ヴァルプルギスの夜」の過程を経て死と忘却から呼び返されたヘレナが再び冥府へと戻ったのちに、彼女の分身とも言える合唱隊によって歌われたものを思い起こさせる。しかし「山峡」の場における生命力の謳歌が、かつての「翳深き杜」におけるものと異なる点は、上述した愛の要素と、そして新たに浄化の要素が加わったことである。浮遊する教父の宿る天上的な「聖なる愛の宿り」に於いても、その大気は「毒を孕」んでいた。それは、この地帯が昇天過程の未だ低い段階に位置していることを意味するだけではなく、四大元素の働きによって活性化される生産性そのものにも、完全に清浄ではない要素が内在することも明らかにしているのである。そして、そのような生産性に裏打ちされた地上的な営為は、必然的に何某かの欠陥を伴わざるを得ない。人間の活動性が無垢のものとなるためには、先ずその基盤となる生産性が浄化されなければならない。現象的には本来不可能であるこの業は、「全能の愛」によって成し遂げられる。言わば地上的な生産性が止揚され、天上的な聖なる生産性が確立されるのである。

深遠の教父をファウストの発展段階の中に位置付けるとすれば、極端な主観性を脱却して、世界の中に置かれた自己を客観的に認識し始める第二部が該当するだろう。深遠の教父の口調は、法悦の教父の熱狂的な自己中心性と比べると、遥かに客観的で冷静であり、その認識も一段と高められているからである。彼は、この場所に「愛の使い」が派遣されており、その働きを及ぼしていることを知っている。しかしながら彼自身の思念はやはり地上的な感覚の限界内に囚われているので、そこからの解脱を真摯に願っている。

これら二人の教父は、いずれも地上性の残滓を拭い切ってはいない。そして彼等が「山峡」の場でファウストの「不死なるもの」と直接的に触れ合うことがないのは、ファウストの地上での境地に併置される天上での存在としての役割を、彼等がその本質の一部として担っているからではなかろうか。即ち、彼

らはファウストが地上で送った精神生活の総まとめともなっているのです、そこから抜け出て来たファウストの「不死なるもの」と再び出会うべきではないからである。

しかし彼等の次には地上的性格から完全に自由な者達が登場し、本格的にファウストの天上での代行者となる。それが「昇天する童子達」である。そしてこの童子達に接する教父は、前述の二人よりも更に上位の境地にある。「天使セラフィムのような教父 (Pater Seraphicus)」は、愛の存在を「神の現存」として認知するだけではなく、彼自身が「愛するもの」である。彼は前出の二人の教父のように自らの不完全性に悩むことはない。しかし、その彼といえども、童子達の清浄さと比べれば、やはり地上的であることが、直ぐに明らかとなる。

#### 天使セラフィムのような教父、中層で。(11890~11893)

なんと見事な朝雲が漂うことか、  
揺らめく髪のような樅の木立を抜けて。  
さて、あの雲の中で生きているものとは？  
あれは、幼い霊達の群れだ。

#### 昇天する童子達の合唱 (11894~11897)

お教え下さい、教父さま、私達が漂っている所はどこなのでしょう、  
お教え下さい、善き人よ、私達は誰なのでしょう。  
私達は幸せです。私達のみんな、みんなには、  
こうしていることが、とても安らかなのです。

#### 天使セラフィムのような教父 (11898~11913)

童子達よ！真夜中に生まれたもの達よ、  
半ば開かれた精神と五官よ、  
二親には直ぐに失われたもの、  
天使達には授かりもの。

ここに一人、愛するものがいあわせることを、  
君たちはきっと感じ取っているのだ、だからさあ近くへ。  
だが、幸いなるもの達よ、君達は、  
険しい地上の道筋の痕跡もとどめてはいない。  
さあ降りて来なさい、そしてはいりなさい、私の目の、  
世界と地上に適った器官へと。  
それを君たちの目として使えばよい、そして  
この周りをよく見てごらん。

教父は彼らを自分の中へ取り入れる。

あれが樹木だ、あれが岩山で、  
水流がたぎり落ちている、  
そして物凄い迸りとなって  
険しい道程を切り詰めているのだ。

「真夜中」に臨終を迎えたファウストは、この後まもなく「真夜中に生まれた」童子達の仲間となる。即ち、ファウスト上昇の階梯を童子達が引き継いでゆくことになる。それゆえファウストとこれらの童子達との親近性の拠り所を考察することは重要であろう。彼等は、後出の「贖罪の女」とファウストの間に介在する働きも担っているのだが、それはファウストがグレートヒェンとの間に儲けた嬰兒を共通項としているのかも知れない。しかし、童子達が「幸いなるもの達 (Glückliche)」と呼ばれるとき、本論で後述する意味合い以外に、ファウストのラテン語形 Faustus の意味、即ち「幸運なるもの」までをゲーテが意識して用いたのかは、不明である。<sup>2)</sup>

キリスト教の教義から言えば、生まれて直ぐ死んだ幼児でさえも、原罪を免れ得ない。しかしゲーテはこの教義に拘泥せず、——原罪に対するゲーテの否定的な見解は『牧師の手紙』から読み取れる。「原罪について私達は何も出来



ません。そして現実の罪に対しても同様です。それは足のある人が歩くのと同じように自然なことなのです。』<sup>3)</sup> ——童子達に彼独自の特性を与えている。即ち、肉体として地上に存在したことの無い童子達には、地上的な存在に対して必然的にまとわりつく行為＝罪の方程式が適用されていない。この特性は、童子達に仮初めの肉体性が提供され、地上における諸元素の荒々しい活動が示された時に見せる彼らの拒絶的な反応にも暗示されている。

### 昇天する童子達，内部で（11914～11917）

ほんとによく見えますね。

でもこの中は暗すぎます。

怖くてぞっと身震いがします。

気高いお方，優しいお方，私達を放して下さい。

童子達にとっては天使セラフィムのような教父の肉体であっても、それが肉体であり、本質的に地上の存在である限り、暗鬱たるものに思えるのである。

童子達はすぐさま解放され、彼らに相応しい、より高く清澄な階層へ昇るよう促される。そこで彼らは非物質的で清らかな糧を享受し、非肉体的な霊として成長することを期待されている。

### 天使セラフィムのような教父（11918～11925）

もっと高い階層へ昇ってゆくがいい、

いつもそれと判らずに成長するがいい。

それは、永遠に清らかな流儀で、

神の現存が力づけるままに。

なぜならそれこそが、霊達の糧であり、

自由このうえない天空を満たすものだから。

永遠(とわ)なる、愛することの啓示であり、

至福へと花開くものだから。

上述したとおり、この次元で既に神の現存が言及されており、その愛の本質が顕示されている。それは即ち、この山峡の場が「天国」へ至るまでの単なる中途の段階ではなく、仮装された天国であることを改めて示すものである。しかしそれはあくまでも仮装であり、それゆえ愛の力による成長は知らないうちに（unvermerkt）遂行される。

昇天する童子達の合唱、最も高い頂上群の周りを巡回しながら（11926～11933）

手と手をつなごう、  
 楽しく仲間の輪を作ろう。  
 舞いながら、歌いながら  
 聖なる気持ちを表そう。  
 神の教えを受けて  
 心も安らか。  
 崇めるお方を  
 目にするでしょう。

童子達は、この天上での最高存在を直接的に目にする能力を与えられているのである。それがファウスト自身には不可能であることは、後述する。

天使達、より高い気圏を浮遊しながら、ファウストの不死なるものを担いつつ（11934～11941）

精霊世界の高貴な一員が  
 悪から救われました。  
 「たゆみなく努め励むものを  
 私達は救うことができます。」  
 そしてこの人にはさらに  
 上からの愛さえ加わっているのです。  
 至福の群がこの人を

心を込めてお迎えます。

「たゆみなく努め励むものを、(天使達が)救うことができる」という命題がファウスト救済の核心であること、そして救済には「上からの愛」もまた必要であることは、ゲーテ自身がエッカーマンに語っている。<sup>4)</sup> そして、はじめに述べたとおり本論の目的は、この救済が登場人物個人の次元を超えて、ここで表明されている原理そのものを対象としていることを、その内的なメカニズムとともに解明することである。

ファウストは「悪」から「救われた」のであり、彼の「罪」が「許された」のではない。ここでは、彼の行為の道德性が問題となるのではなく、彼の弛みない努力が必然的に罪と結びついてしまう、地上的な生存の制約が問題の中心なのである。

「至福の群 (die selige Schar)」とは、天使達が自らを三人称で呼んだものではなく、本来の用法である第三者、即ち「昇天する童子達 (die seligen Knaben)」を指すと解釈できる。このことは、ここにいる天使達ではなく童子達が「上からの愛」の一翼を担うことを意味する。

#### 若年の天使達 (11942~11953)

愛する＝聖なる贖罪の女達の  
手からもたらされたあの薔薇の花が  
私達の勝利を得る助けとなりました。  
お陰で高度な業を成し遂げ、  
この魂の宝を勝ち取りました。  
薔薇を撒けば邪悪は退き  
薔薇をあてれば悪魔は逃げ去りました。  
受け慣れた地獄の責め苦に代わって  
悪霊どもは愛の苦しみを感じたのです。  
あの年功を経た悪魔の親玉でさえ

鋭い苦痛に貫かれたのです。

声をあげて祝いましょう！ ことは成りました。

「埋葬」の場でメフィストーフェレスの手からファウストの魂を奪い去る際に威力を発揮した薔薇の出所が、ここで初めて明らかにされる。同時に、その贖罪の女達が愛と聖の二重の特性を備えていることもまた表明されている。その愛がエローティッシュなものと呼べることは、後述することになる。

#### もっと完成した天使達（11954～11965）

私達にとってやはり地上の残滓は

運ぶにつらいものです。

たとえそれが石綿からなっている

清浄ではありません。

もし強靱な精神の力が

四大元素を

自分のもとへ引き寄せたなら

どんな天使であっても

密接な両者の、ひとつになった二重の本性を

分かってるものではありません。

それはただ永遠の愛だけが

分離できるのです。

ファウストの活動する精神は、いまだに地上的、物質的な特性から自由にはなっていない。『西東詩集』に収められている詩「再会」によれば、四大元素は太初の創造の時に分離したものであり、それらの元素による生産性は地上的な限定に支配されている。即ち、精神と四大元素が結びつき、「二重に」なって構成されていることが、地上の生の宿命なのであり、そこでの生は、死に裏打ちされたものなのである。

## 若年の天使達 (11966~11980)

霧のように岩の峰を囲みながら、  
いま私は感じます、  
身近に躍動する  
霊達の生命を。  
ちぎれ雲がはっきりとして来ます、  
私には昇天する童子達の  
活発な一団がみえます。  
地上の重荷をまぬかれ  
仲間の輪を作り、  
天上の世界の  
新たな春のあでやかさに  
活気づいているのです。  
この人もまず初めは  
この子達の仲間となり  
昇りつつ発展を完成させるのがよいでしょう。

童子達を指して言われる「霊達の生命 (Geisterleben)」は、「霊的な生命」と訳し換えることも出来る。それは、最初から地上的な制約を脱却している「聖なる生命」である。現実の「生」を持たない童子達の純粋な生は、それゆえにこそ Pater Seraphicus から「幸いなるもの達 (Glückliche)」と呼ばれている。彼らを指して言われる selig という形容を本論では、「昇天する」と訳したが、この意味合いに於いて、selig はこの glücklich と同義語となる。

そして「永遠の愛だけが・・・できる」「分離」が、ここで童子達により成し遂げられていることに注目しなければならない。彼らが「永遠の愛」の代行者となりうることは、上に引用した Pater Seraphicus の台詞によって暗示されている。彼らは既に「神の現存」によって力づけられ、彼ら自身が「至福へと花開く」「永遠(とわ)なる、愛することの啓示」となっているからである。

童子達が「上からの愛」の「使い」と成ることは、即ち彼等が「天使」と成る「保証」を得ることである。この、本質として「上から」の力が、その発現としてはファウストとともに「下から」昇って来ているという構図には、不思議な感動を呼び起こす力がある。

#### 昇天する童子達（11981～11988）

喜んで私達は迎え入れます、  
いまは蛹のこの人を。  
それで私達は天使の保証を  
手に入れることになります。  
取ってあげましょう、  
この人を覆っている繭屑を。  
もうこの人は美しく、大きくなりました、  
聖なる生命によって。

ファウストは天使達の手から離れ、今度は童子達と一体化することによって、新しい、非地上的な生命を得る。そしてこの「生命」の特質は、その発現に際して、即ち「たゆみなく努め励む」ことに於いて、不可避的に「罪」と結びつくことを完全に免れているところにある。ファウストの救済が、彼が生前に犯した罪からの救済でないことは既に述べた。上述したように、作品『ファウスト』に於いて救済されるものは、人間が地上で弛みなく行動すれば、それが不可避的に悪へと至る——「無制限の活動は、それがどんな種類のものであれ、結局は破産する。」<sup>5)</sup>——という構造そのものなのである。そして弛み無い活動性は、天上に於いてさえも引き続き要請されている。このゲーテ独自の天国像は、例えば仏教の「涅槃」や「無」とは対極に立つものであり、またキリスト教的な、神のもとでの永遠の安息という観念とも異質である。

ファウストが「昇りつつ発展を完成させる」ためには、上述した生命力の賦与だけでは不足である。なぜなら童子達の非肉体性には、その特性ゆえの限界

も存在しているからである。童子達と同様に肉体を持たない存在であったホムンクルスがそうであったように、彼等もまた hermaphroditisch であると見なすことは、妥当であろう。両性具有とも訳される、この特性は、『ファウスト』という作品に於いては、肉体を持たないがゆえに性的な要素も欠如している状態を意味している。そして、「成る (werden)」ことを希求していたホムンクルスのフラスコを打ち碎き、夜のエーゲ海に満ち満ちた生命力と同化させたものは、ガラテアという形象に具現されたエロスであった。

言わばいまだ静的なポテンシャルとして横溢している生命力に動的なモメントを与えるためには、ここでもまたエロスの力が必要とされている。ファウストを、即ち人間的な行為を救うものの名を挙げるとすれば、言うまでもなく、それはこの「山峡」の場の冒頭から繰り返し表明されているように、「愛」である。聖なる愛、永遠の愛、全能の愛こそが「すべてを生み出し、すべてを育む」ものであり、それは、四大元素の生産性を支え、浄化し、また天使達やファウストの永遠の生命を可能にしている。そして、ここで言うエロスとは、その愛が性的な形を取って発現したものを指し、『ファウスト』の天国では、それが大胆に是認されるのである。キリスト教的な「愛」と、古典古代的な「エロス」が、ここで高度の融合をみている。

ドラマの筋立てとして、この過程は、両性具有的な天使達・童子達から贖罪の女達・グレートヒェンへとファウストの魂が引き渡されるという形を取っている。だが、単に形式を借用しただけとはいえ、カトリック的な様相を呈する天国に、エロスという異教的な、またゲーテの同時代人の多くにとっては冒瀆的とも言える要素を導入することが作品にとって大層な冒険であったことは否めない。そのためゲーテはひそやかに周到な展開を用意している。

次に登場する聖母マリア崇拜の博士 (Doctor Marianus) が呼びかける言葉の中に、男性から女性へと向けられたエローティッシュな衝動が含まれていること見逃してはならない。博士はこのようなエロスの働きを是認してくれることを「栄光の聖母」に請い求めるのである。そして、それに対応するかのようには聖母自身も、キリスト教の聖母マリアの伝統とは異質のものとなっている。

キリスト教の教義ではマリアが神と同等に置かれることはなく、ましてや異教的と言える複数形の「神々」という呼称は問題外である。

**聖母マリア崇拜の博士、最も高い、最も清浄な岩窟で（11989～12012）**

ここには見晴らしを妨げるものがなく、  
精神は高揚する。  
かなたを婦人達が過ぎてゆき、  
浮遊しながら上へと向かっている。  
中央の、威厳のあるお方、  
星の王冠を戴いたお方は、  
天空の女王だ。  
その栄光で見て取れる。

**陶醉して**

世界を治めたまう至高のお方よ！  
私の目に紺碧の、  
一面に張り渡された天蓋の中で  
御身の秘密を明かして下さい。  
是認して下さい、男の胸を真剣にそして  
優しく動かすものを。  
そして聖なる愛の欲求によって  
御身へと向かわせるものを。

私達の気持ちは抑えようがありません、  
御身が神々しくお命じになるとき。  
不意に熱情は静まります、  
御身が私達を満たして下さいのままに。



処女よ、こよなく美しい意味で清きお方  
聖母よ、崇拜に相応しいお方、  
私たちへと選ばれた女王よ  
神々に等しいお方。

処女でありながら母であるという神秘的な特性により、地上的な生の限界と汚濁を捨象した生産性として聖母は「最も美しい意味で純粹 (rein)」である。この聖母の「神々に等しい」権能に支配されて、マリア崇拜の博士に代表される、男性から女性への「熱情」が、エローティッシュでありながら同時にまた神聖であるという神秘が達成される。

このエロスと神聖との結合を具現する聖母は、言わば「啓示されている秘密 (ein offenbares Geheimnis)」<sup>6)</sup>として、紺碧の天蓋に包まれ、栄光に輝いている。このような秘密は、隠されていることによって神秘的ではなく、我々の眼前に提示されながらも我々にはその本質が見えないことにより神秘であり続ける。そして聖母は博士にとって近寄れない対象であり、依然として神秘のままとどまっている。

聖母に関して博士が「その栄光で」と言い、後にグレートヒェンが「輝きに満ちたお方」と形容するとき、それは比喩的な意味だけではなく、実際に聖母が眩い光を放ち、近くでは直視できない存在なのだと解釈すべきである。博士が彼女を「見て取った」のは「かなた」から見晴るかした状態でのことであり、まわりを贖罪の女達の「薄雲が絡まりついて」いる「中央」に聖母は位置している。それはちょうど第二部の冒頭で、生命力の根源とも言える太陽をファウストが直視できず、滝の飛沫によって生じる虹のうちに生 (das Leben) を見て取ることと重なる。ただし、ここでは「生」そのものが地上の生よりも高次のものであることは、これまでに繰り返し述べて来た通りである。新しい生の根源からの慈愛にも、「薄雲」である贖罪の女達の介在が必要なのである。そして更には、童子達もまた「朝雲」として先ず登場したことを思い出すべきだろう。彼らもまた、ファウストと聖母との仲介をする役割を担っているからで

ある。

(12013~12031)

あの方の周りを  
薄雲がとりまいている。  
贖罪の女達だ。  
たおやかなものたち。  
あの方のお膝下に  
天空の気をすすりながら、  
慈愛を請い求めながら。

触れることの適わぬお方よ、御身には  
法外ではありません、  
たやすく誘惑される女達が  
親しく近づくことが。

まんまと骨抜きにされて  
女達は救いがたくなっています。  
欲望の鎖を  
誰が自らの力でひきちぎりましょうか。  
傾いた、滑らかな床では、  
なんと早く足が滑るでしょうか。  
見つめられ、語りかけられ、熱い息で褒められて  
惑わされないものがあるのでしょうか。

博士がここでとりなしているエロスの方向性は、今度は女性から男性へ向けられたものとなる。そして、これら贖罪の女達は、グレートヒェンのため聖母に恩寵を請い求める。彼女達は代弁者である。しかし、キリスト教の正典であ

る『旧約聖書』と『新約聖書』,そして様々な外典や偽典には,数多くの女性達が登場するにもかかわらず,「聖徒行状記(Acta Sanctorum)」とゲーテが言わば便宜的に名付けた<sup>7)</sup>伝説集にまで選択の枠を広げて,彼女達が選ばれた理由はなんだろうか。彼女達の持つ共通点は,それぞれが罪を犯し,悔い改め,しかもその罪が,直前のマリア崇拜の博士の表明にあるように,異性とのエロティックな関係に原因を有することである。それぞれの女は自身の事柄を述べている。そして,それはどれも微かではあるが,グレートヒェンに通じる要素を持っているのである。そして彼女達の地上的な罪が,言わば *felix culpa* (幸いなる罪過)として,聖別された次元への端緒となった事例を通して,グレートヒェンの地上的な,肉体的な愛もまた,天上的な,栄光の聖母の愛へと通じるものとして認証さるのである。

栄光の聖母がこちらへと浮かび寄る。

#### 贖罪の女達の合唱(12032~12036)

御身が高く漂うのは  
永遠の御国。  
切なる願いをお聴き入れください,  
御身 比類なきお方,  
御身 慈愛に満ちたお方よ。

#### 罪深き女(ルカ伝第7章第36節)(12037~12044)

神の本体を示された御子の足元に,  
パリサイ人のあざけりをもものともせず,  
涙を香油と注いだ  
あの愛にかけて。  
よき香りをあれほど潤沢に  
滴らせたうつわにかけて,  
聖なるおみ足をあれほど柔らかに

拭いまいらせた巻髪にかけてー

「罪深き女」が「御子」のために成した帰依と献身は、グレートヒェンがファウストへの純粹な愛ゆえに、その「甘い肉体」<sup>8)</sup>を愛する男に委ねた行為と、それゆえに被らなければならなかった「あざけり」と重なっている。

#### サマリアの女（ヨハネ伝第4章）（12045～12052）

その昔既にアブラムが家畜の群れを  
連れて行かせた泉にかけて。

救い主の唇に涼しく触れることを  
許された手桶にかけて。

あの清浄で、豊かな湧き水にかけて、  
いまやそこから注ぎ出し、  
滔々と、永遠に澄み渡り

あらゆる世界をめぐる流れ行く、その湧き水にかけてー

「ヨハネ伝」第4章に記述されている「泉」がヤコブの泉であることは、つとに指摘された事実である。ゲーテはこれを故意にアブラムのものへと改変している。では、このようにして読者の意識の中で突出させられた泉とサマリアの女の組み合わせが、どのような要素でグレートヒェンと結びつくのであろうか。サマリアの女は、かつて5人の夫を持ったが、いまは正しく夫とは呼べない男と暮している。彼女はそのことをイエスに言い当てられて胸を打たれ、彼を預言者と認める。またグレートヒェンの方は、結婚していない男の子供を身ごもった友人の哀れな境遇を知り、それを自分の身の上に置き換えて罪の自覚に苦しみ始めるのだが、それが第一部の「泉の傍ら」の場なのである。「泉」は、両者にとって悔悟と、それによって罪を清める出発点の場所となっている。

## エジプトのマリア 聖徒行状記 (12053~12060)

主のお体を降ろしまいらせた

いとも聖別された場所にかけて。

その門から私を戒めるように

突き返したあの腕にかけて。

私が身を修めつつ砂漠で過ごした

四十年の懺悔にかけて。

私が砂に書き記した

最期の告別の辞にかけて—

Schiffshure であったとされる<sup>9)</sup>「エジプトのマリア」が聖なる場所から押し返されたように、グレートヒェンもまた「聖堂」の中、祭壇の前で悪霊 (Böser Geist) からの呵責を受け、聖者達から拒絶されることを宣告されている。

## 三人で (12061~12068)

重き罪を犯した女達が

お側に寄ることを拒まれないお方、

そして悔い改めで得るものを

永遠へと高められるお方よ、

この善良な魂にも、それに相応しい

御身のお赦しをお授け下さい、

この者は一度ただ自分を忘れ、

おのれが誤ったことさえ気づきませんでした。

このように、三人の女達は、それぞれの悔悟を通じて得られた自分への恩寵に、グレートヒェンもまた与れるよう聖母に祈る。上述の共通点によって彼女達はグレートヒェンと一体化し、グレートヒェンがエローティッシュな愛ゆえ

に犯した罪が彼女達を通じて、救済の導きとなるのである。既に第一部で「救われた (gerettet)」グレートヒェンが、いまここで「赦し (Verzeihen)」を請うている。それによってグレートヒェンのファウストに対する地上的な愛は、天上的な、穢れのないものへと浄化されるが、しかし決してそのエロティックな本質が捨象されることはない。

一人の贖罪の女、かつてグレートヒェンと呼ばれた女。聖母にすがりついて。

(12069~12075)

こちらへ、こちらへ、振り向けて下さい  
 御身 比類なきお方  
 御身 輝きに満ちたお方よ  
 慈愛深くそのお顔を私の幸 (さち) へと。  
 むかし恋しく思った人が  
 いまはもう濁りのない人となって、  
 立ち戻りました。

この詩句の冒頭四行が、第一部の「外郭沿いの路地 (Zwinger)」の場で、「悲しみの聖母 (Mater dolorosa)」に向けられたグレートヒェンの痛切極まる祈りの変形であることは、注釈者が揃って指摘している。そして、かつては「悲しみに満ちたお方」に、その顔をわが身の「苦難 (Not)」に振り向けてくれるよう願った、その全く同じ言い方の、今度はその向けられる先が「幸 (Glück)」であることにも、やはり言及がある。苦しみがそのまま祝福へと変転する神秘をこのように表現する技法は、感動的である。またこれにとどまらず、ゲーテ的理念を担った「栄光の聖母 (Mater gloriosa)」が、伝統的な「悲しみの聖母」とグレートヒェンの精神を通じて同一化されていることにも注目すべきである。これにより、「山峡」の場で聖母に付与された、あまりにも斬新で独特な特性ゆえに、そのままではややもすると捉えどころの無くなる恐れのある詩的形象が、宗教的伝統のなかで安定する効果も発揮されている。

昇天する童子達、輪を描いて動きながら近寄る。(12076~12083)

この人はもう力強い手足で  
私達をしのいでいます。  
心のこもったお世話に  
有り余るお返しをしてくれるでしょう。  
私達は早ばやと  
世の命の集いから遠ざけられました。  
でもこの人は学んだのです。  
私達に教えてくれることでしょう。

上述したように、性的な要素を欠く童子達は、エロスの領域には力が及ばない。最初から完全に非地上的な存在として登場した童子達と、今や肉体と地上的な残滓を拭い去られて純粋な精神となったファウストが「四肢 (Glieder)」に関して優劣を問題とするからには、そこに象徴的な意味がなければならない。ファウストのかつての肉体性は、エロスを通じて童子達を凌駕する契機を含んでいるのである。

あの、一人の贖罪の女、かつてグレートヒェンと呼ばれた女。(12084~12093)

気高い精霊の集いに取り巻かれながら、  
新しいこの人は、自分で自分がわかりかねています。  
新鮮な生命に殆ど気づいていません、  
それでももう聖なる一団と等しくなっています。  
ご覧下さい、この人の様子を。古い殻となる  
地上の絆を一つ残らず振り払い、  
そして身にまとった天空の気からは、  
原初である青春の力があふれ出ています。  
私がこの人を教えることを、お許し下さい。  
まだ新しい昼が、この人の目を眩ませています。

この「新しい昼」は新しい永遠と呼びかえてもよい。<sup>10)</sup> 死の直前に Sorge によって奪われた視力は「新鮮な生命」によって回復している。無論ここでの「目眩み」の意味は、それにとどまるものではない。再び第二部冒頭の太陽＝生の根源とのアナロジーが呼び起こされ、「新しい昼」が聖なる命の永続性であることが示される。そして直接触れることの出来ない対象の、舞台上での形象が、ここでは栄光の聖母なのである。ファウストに対する栄光の聖母の恩寵は間接的であり、ファウストに限らず、男性は栄光の聖母を直接見ることは出来ない。かなたからは聖母を見て取り、ここでは「まなざしをあげ、救い主のまなざしを仰ぎ見よ」と呼びかけるマリア崇拜の博士自身でさえ、聖母の顔を目にすることは叶わない。この事実は、彼が「伏礼 (auf dem Angesicht anbetend)」していることで明白にされている。

それゆえ、聖母が「おいで」と呼びかける相手は、ファウストではなくグレートヒェンである。

#### 栄光の聖母 (12094～12095)

おいで！もっと高い天球へ昇りなさい！

そなたと覚れば、この者は後を追います。

グレートヒェンを介在してのみファウストは聖母の恩寵に与ることが出来る。上に述べた薄雲としてのグレートヒェンの役割から当然であろう。そしてファウストの仲介者として、グレートヒェン自身も「もっと高い天球へ昇る」必要がある。ファウストの目はグレートヒェンに向けられ——「そなたと覚れば」——、ファウストはグレートヒェンを通じて「変容 (umarten)」し、聖母への礼拝が叶う身となる。

#### 聖母マリア崇拜の博士、伏礼しながら。(12096～12103)

まなざしをあげ、救い主のまなざしを仰ぎ見よ、

悔いを知る、たおやかな者たちよ、ものみなが、



祝福された宿命へと  
感謝しつつ変容するために。  
向上した心はことごとく  
御身への献身に備えるべし。  
処女よ、母よ、女王よ、  
女神よ、変わることなく慈愛深くあれ！

### 神秘の合唱（12104～12111）

すべての移り行くものは  
ただひたすらに譬えなのだ。  
達し得ないことが  
ここに出来事となる。  
言い表せないことが  
ここに成し遂げられた。  
永遠にして女性的なるものが  
私達を上を引き寄せる。

## 完

「譬え（Gleichnis）」という言葉を一般的に解釈し、この世のことはすべて仮象なのだという意味に最初の二行を言い換えることも出来るだろう。しかし、それだけでは、この表明の積極的な志向を実感することは出来ない。ゲーテが比喩について語っている個所を『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』から参照してみよう。

「奇跡と比喩（Gleichnis）を通じて新しい世界が開かれます。奇跡は平凡なものを尋常ならざることにしますし、比喩は尋常ならざるものを平凡にします。・・・（中略）・・・例証がその意味を一番早く解明してくれるでしょう。食べたり飲んだりすること以上に平凡でありふれたことはありません。それに

対して、或る飲み物を崇高と成したり、或る食べ物を無数の人々に足りるよう数を増すことは、尋常ならざることです。病気や肉体的な障害よりありふれたことはありません。しかし、それらを精神という手段で、もしくは精神に似通った手段で取り除き、癒すことは尋常ならざることです。そして、まさに、ありふれたことと尋常ならざることが一つになること、可能なことと不可能なことが一つになることによってこそ、奇跡の奇跡たる所以が生じるのです。比喩に於いて、寓話に於いては、その逆です。ここでは、意味が、洞察が、概念が、高きものであり、尋常ならざるものであり、手の届かないものなのです。もしその概念が、平凡な、ありふれた、分かりやすい姿で具象化され、それによって、概念が私達に向かい、生きて、目の当たりに、現実として歩み寄って来るのならば、そして私達が概念を自分に取り入れ、それを把握し、それを保持し、それとまるで同輩のように付き合えるならば、それはやはりまた第二の種類の奇跡であって、当然あの第一の奇跡と同列に置けるものでしょう、いやもしかしたらそれを凌駕しているでしょう。』<sup>11)</sup>

ここで比喩は寓話と並列関係に置かれている。それらは、日常性を超えた高い意味を持つ尋常ならざるものを、我々に理解しやすい形に変えて写し出す手段なのである。そこでは「手の届かないもの (das Unerreichbare)」が、「目の当たりに、現実として歩み寄って来る」。即ち、「達し得ないこと (das Unzulängliche)」が、「ここに出来事となる」。この働きがあるゆえに、本来虚構である詩作品が真実となり、そしてこの真実がある限り、作品が古い物語として時の彼方へ消え去って行くことはない。この「山峡」の場で描き出されているファウストの変化・向上も、「すべての移り行くもの」の一つである。現実の世界では、必ず破産する無制限の行為が、この天上という寓意の体系下では「祝福された宿命」として必然的に救済される。

『ファウスト』の終幕に於いて救済されるものが行為の本質そのものであるという命題の問題性は、現代に於いても消滅してはいない。『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』でゲーテが描いていたように、近代工業化の波はひしひしと押し寄せてはいたが、「環境」という概念がまだ普遍化していなかった

時代における、一見素朴にさえ思える「行為」の賛美は、現代人の感覚からすると、古臭く、問題性がずれているように見えるかも知れない。しかし現代の我々が自己実現のための「行為」をすることによって不可避免的に地球を汚染し環境を破壊していることから自由になるためには、単なる行為の否定だけで解決が見つからないことも事実であろう。全世界的な生産物流通と情報通信によって成り立っている現代社会を、もう一度狭い地域内だけの、自己充足的な閉じられた社会にもどすという試みは、あまり現実的な選択とは言えない。我々は、今以上のエネルギーを消費するよう決定づけられていて、自己の基盤を破壊してしまわなければ、既に引返せないところまで来ているのかも知れないのである。それゆえ、膨大なエネルギーを獲得し消費しつつも、自己の生態系を破壊しない方策を探らなければならない現代人に対して、無制限の行為がその悪しき結果から救済され、汚れなき聖なる行為として、更に高い領域で実現されるという、この「達し得ないこと」が「成し遂げられ」る天国は、いかにもイロニッシュであり、「言い表し」難い示唆に富むものなのである。ゲーテ自身の面影を多分に含んでいるように見える Doctor Marianus に倣い、我々もまた、神性である生産性に対し、即ち永遠にして女性的なるものに対し、この作品の最終的な核心を成す言葉を借りて、こう祈るほかはないのであろうか。

女神よ、変わることなく慈愛深くあれ！

#### 註

- 1) 原典としては、主に Hamburg 版ゲーテ全集を用い、Weimar 版を適宜参照した。Goethes Werke. Hamburg 1967. 8. Aufl. 及び Goethes Werke. Weimar 1887. 三修社による復刻版。引用文中の括弧内の数字は、詩句の行を表す
- 2) この個所との直接的な関係はないが、Weimar 版の補遺部分に、次の詩句がある。15. Band, Erster Abtheilung, S. 342. “Faustus, mit Recht der Glückliche genannt,”
- 3) Weimar 版ゲーテ全集。Bd. 37, S. 158.

- 4) Eckermann: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens. Wiesbaden 1975. S.382. 1831年6月6日。
- 5) Hamburg 版ゲーテ全集。Bd.8, S.286.
- 6) この表現をゲーテは好んで用いた。例えば, Eckermann.S.501. 1827年10月8日。
- 7) Hamburg 版ゲーテ全集。Bd.3, S.635による。
- 8) 第4197行
- 9) Goethe Sämtliche Werke. Deutscher Klassiker Verlag 2. Aufl. 1994. I. Abteilung: Bd.7/2, S.808.
- 10) 長谷川 茂夫: 「ゲーテの『ファウスト』第二部に於ける天使達の合唱」 鹿児島大学文科報告 第30号 第3分冊 1995年。96~97頁を参照されたい。
- 11) Hamburg 版ゲーテ全集。Bd.8, S.162. 中略は筆者による。